



年頭のごあいさつ

茨城県知事
茨城県統計協会総裁

竹内藤男

新春にあたり、謹んで皆様のみすますのご健勝とご活躍を心からお祈りいたします。

昨年、私は県民の皆様のみあたたいご支援をいただき、三たび茨城県政をお預かりすることとなり、常陸那珂港の重要港湾の指定や港湾計画の決定、霞ヶ浦導水事業のとりまとめ、そして県立小児医療センターの着工、県南西地域をカバーする救命救急センターを含む筑波メディカルセンターや水戸北部中核工業団地の起工など、昭和60年代の飛躍の足がかりとなる重要な事業に新しく取り組むとともに、科学万博の関連諸事業等の仕事を順調にすすめてまいりました。

ここに、皆様のご理解とご協力に対し、厚くお礼を申し上げます。

本県には豊かな風土のもと、味わい深い伝統が受け継がれており、今後、これに筑波研究学園都市などの先端科学技術研究の集積と科学万博開催による国際性が付加されるわけであります。私は、この本県の独自性を存分に活かしきることにより、新しい茨城文化を創造できるものと考えております。

その意味で、本年は昭和50年代の総括と昭和60年代の幕開きの年であり、科学万博開催の前年にあたり、各種施策の展開の上からも大変重要な時期にさしかかっております。

その一方で、経済はゆるやかな回復に向ってはいるものの、国、地方ともに厳しい財政状況にあります。また、“人生80年時代”に対応した総合的な高齢者対策や民間の活力を取り入れた地域福祉の推進、技術革新等の時代に即した産業の刷新や心の豊かさを育み地域に連帯の輪を広げる文化の振興など、新たな課題も数多く抱えております。

このようなときにあたり、私は、徹底した行財政の見直しを行い、県民が真に求めている施策と10年後、20年後の茨城を考え、その骨格を築く事業とを重点的に押し進め、県民生活の質的充実と茨城県の総体的なレベルアップに全力を傾注してまいりたい覚悟であります。

本年は特に、科学万博という千載一遇の機会を輝かしい茨城発展の跳躍台とするため万全の体制を期するとともに、筑波研究学園都市における先端科学技術研究の集積を起爆剤として県南地域の、ひいては県全体の発展を図るテクノリネージュ構想の具体化に取り組む一方、県中央部等の水源の確保と霞ヶ浦等の水質改善を図る霞ヶ浦導水事業を何とか軌道にのせていきたいと思っております。また、本県の未来を開く新しい発展基盤となる水戸射爆撃場跡地の利用と北関東横断道路の建設を促進するかたわら、本県の基幹産業である農業が新しい時代に即応できるよう農業構造の改善と生産基盤の整備を図ってまいります。

そして、地域住民の創意工夫を取り入れながら、肋骨道路や地域営農団地農道の建設をはじめ、定住条件の整備を図り、県北山間・臨海地域の振興につとめてまいります。

これからも、豊かな郷土・茨城づくりに、皆様の一層のご協力をお願い申し上げます。

新年のごあいさつ



茨城県企画部長
茨城県統計協会長

小 鷺 茂

新年明けましておめでとうございます。

昭和59年の新春を迎えるにあたり、皆様方のご多幸とご健勝を心からお祈り申し上げますとともに、日頃統計行政にお寄せいただい

ておりますご支援、ご協力に対し厚く御礼申し上げます。

昨年は皆様方の絶大なご協力により、住宅統計調査、第7次漁業センサス、茨城県農業基本調査等各種統計調査を順調に進めることができましたことを心から感謝申し上げます。

近年、資源エネルギー問題、貿易問題、行財政改革等、内外の政治、経済情勢は厳しさを加え急速に変貌しております。このような情勢の中で長期的な展望に立ち、時代の要請に応え、しかも効率的に行政を運営していくためには、的確な現状認識と将来予測が不可欠であり、その基礎資料としてより精度の高い統計データが要求されるなど、統計に課せられた役割はますます重要になってきております。

一方、統計に対する需要の増大に伴い、調査内容の複雑、多様化傾向が進む中で、調査関係者の負担の増大や統計調査員の確保と処遇改善など早急に改善すべき課題も生じてきております。

このような時にこそ、統計の重要性を統計関係者一同が改めて心に刻む必要があると思います。近年、国や地方行政、あるいは民間企業においても統計資料に対する需要は一段と強まり、統計が徐々に力を備えてきつつあることをひしひしと感じております。「統計は利用されてはじめて生きるものである」ということをモットーに、我々統計作成者自身は利用者サイドに立って要請に応じてゆく必要があると思います。そして実際に利用され、生かされていくことが統計関係者の願いであると思います。

このような条件づくりに、現在県では各般の基礎的統計データを整理蓄積して、必要な情報を適時適切に得られる「データ・ベース・システム」を昭和54年から実施し、機能の充実に努めております。また、各種統計結果の加工・分析の充実、強化にも努力しております。この中でも特に経済構造を明らかにする重要な経済表である「産業連関表」を手がけ、間もなく完成する見込みです。

調査実施上の改善はもちろんのこと、このように統計利用の面についての改善をも進め、よりよい統計資料の提供を図るとともに、各種広報媒体を通じ県民各位の統計調査に対するご理解とご協力を得られるよう配慮し、統計業務の円滑な推進が図れるよう最善の努力をする所存であります。

本年は、国勢調査実施の前年に当たり、これに伴う準備調査が行われます。

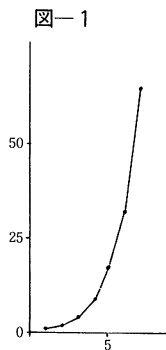
何卒、今年も本県統計事業発展のため一層のご指導とご支援、ご協力をお願いいたしまして新年のごあいさつといたします。

統計雑感 (その1)

昨年5月統計課にきて、54人の仲間と一緒に考えながら仕事をしてきた。その間、何か感じたことを書いてみてくださいませんかというので、新年の祝酒に酔ったつもりで、出さなければならない真新しい年賀状を横目に筆を運ぶことにした。

今年はねのとし、ねずみといえねずみ算を思いだす。これもねずみ算というのかどうか定かではないが、来年は筑波の地で国際科学技術博覧会が開かれる。さあてお立ちあい、御用とお急ぎのない方は、ゆっくりと聞いておいで、(途中省略)取り出したのは、夏なお寒き氷のやいば、1枚の紙が2枚、2枚の紙が4枚、4枚の紙が8枚、8枚の紙が16枚、16枚の紙が30と2枚、32枚が64枚、64枚が1束と28枚、ほれこのとおり……でガマの油売りはこの先の倍々暗算をやめてしまうのである。曾呂利新左衛門であったか一休さんだったか殿様から「ホービをとらせる。何なりと欲しいものを申して見よ」「有難きしあわせ。今日は1粒のお米を頂きとうございます。明日はその倍の2粒。あさってはその倍の4粒と毎日倍のお米を頂きとうございます」「なんだ、そんなものでいいのか」といった殿様が、あとで大慌てをする話がある。これをグラフに書く

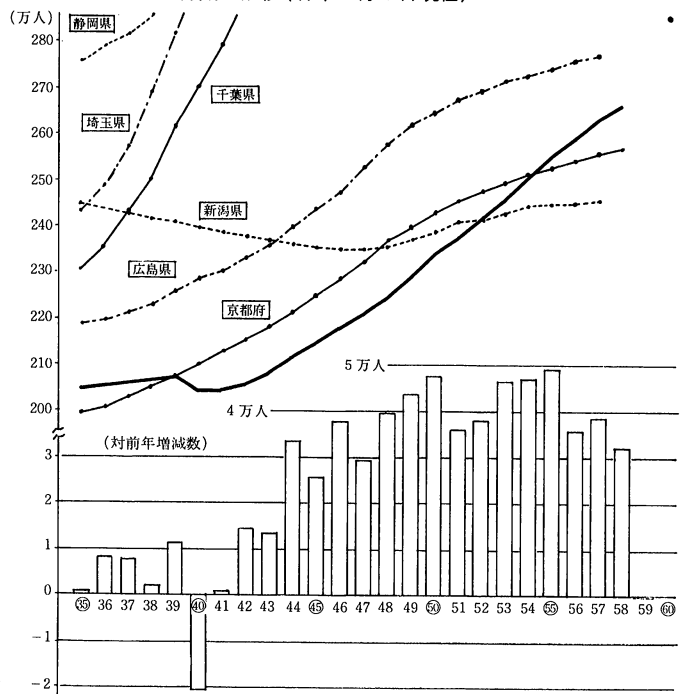
と図-1のとおり曲線で大変な勢で上昇してゆく。1ヶ月後にどの位になるのか。1年後にどの位になるのだろうか。借りもののパソコン、ベーシック・マスター16000で計算をして貰ったら、少しオーバーな表現だが、それこそアッというまに135桁まで計算をしてくれた。(紙の端から端まで数字が並んでいる)経過日数と桁数の関係をグラフに書くと直線になる。1ヶ月後の30日目に5億3,687万912粒。54日目には9,007兆になってしまった。現在のコシヒカリで換算すると、30日目に196俵ということになるので、殿様が何日目にびびり出したのか考えて見ると面白い。55日以降は統計でも使ったことのない京(けい)、垓(がい)、杼(じよ)、穰(じょう)、溝(こう)、澗(かん)、正(せい)、



戴(さい)、極(ごく)、恒河沙(ごうがしゃ)、阿僧祇(あそぎ)、那由他(なゆた)、不可思議(ふかしぎ)、無量大数(むりょうたいすう)と続き、273日目に72桁7,588無量大数となって以後呼称不能におちってしまった。折角計算をしてくれたので452日目135桁の答えを欄外に記念にのせて頂くことにした。コンピュータの世界では、8ビットマシンの次が16ビット、今度は32ビットがでたとか、イチニッパなんて古いよ、もうニゴロの時代なんてことをいう。……閑話休題……

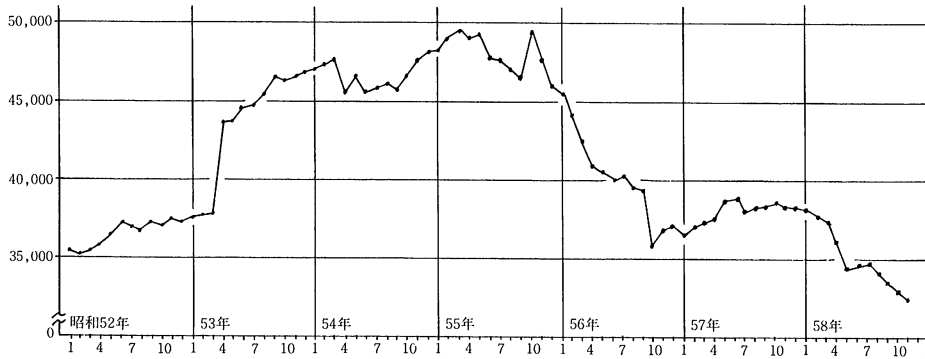
統計は実にいろいろなことを教えてくれる。だから大切にしなければならぬが、つかみ取ろうとしない人にとっては、単なる数字の羅列に過ぎない。それはあたかもレオナルド・ダ・ビンチの名作モナ・リザを見て「あ、有名な絵だね」と通りすぎる人が多い中に、あのほほえみは一体何なんだろうか?背景のあの桂林のようなとんがった山はイタリアのどこなんだろう等とせんさくをする人もいるのに似ている。せんさくをすればする程、何故?何故?が沸いてくる。だが、この忙がしい時代にそんなゆとりはない。

図-2 人口総数の推移(各年10月1日現在)



..... 企画部統計課長 高 倉 修

図-3



人口であり、5年毎に行われる国勢調査の人口をもとに毎月の出生・死亡・転入・転出を足し引きしたものである。55年10月にポコンと山ができてきているのは、そのつなぎ目の誤差であろうか。

衛生部でも人口動

誰かやってくれる人がいればいいんだがなと誰もが考えているに違いない。

県勢の基礎は人口であろう。統計課の壁に最新の人口データが掲示されている。「茨城県の人口を教えてください」という電話が毎月何本かかかってくる。立ちどころに、「いいですよ。11月1日現在の人口は、266万7,778人、73万8,317世帯です。どうも」。この人口は47都道府県中13番目にあたる。ここで図-2をゆっくりと見て頂きたい。

茨城県の人口はそれまで伸び悩んでいた状態を脱して42年からぐんぐんと伸び始めた。53年には新潟県を追い越し、55年には京都府を追い越して今や12番目の広島県に接近しつつある。昭和55年7月に策定された第2次県民福祉基本計画によれば60年には285万人、65年には320万人に達するものと想定している。図中の60年285万人の点と54年の点を結んで頂きたい。60年には広島県をぬいて12番目になりそうであったが実線は少したるんできてしまった。図-3は、過去1年間に増加した人口を月毎に追いかけて見たものであるが55年度当初から鈍化が始まり57年には1時も直すかには見えませんが現在ますます鈍化が進んでいる。広島県を追いこすのは当分お預けということになりそうである。

ここで人口についての基礎知識を学んで見よう。これまでとりあげてきた人口とは推計

態調査で人口を扱っているが、統計課の常住人口が、役場の窓口に届けられた日をもとに集計をしているのに対し、出生年月日、死亡年月日をもとに集計をしており、ある月の出生・死亡数はより正確なものといえる。地方課で集計

図-4 県外転入・転出・出生・死亡数(歴年)

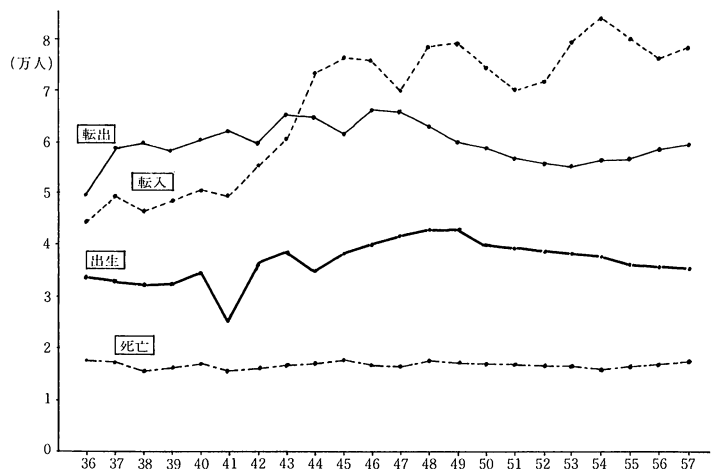
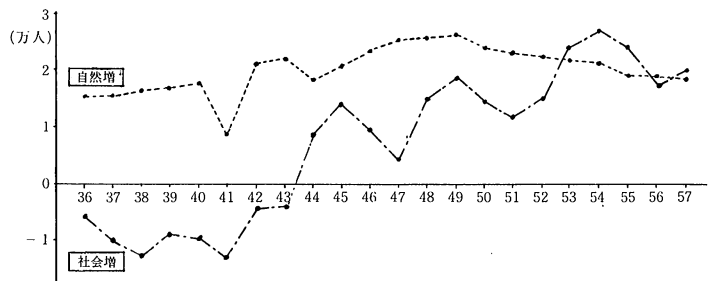
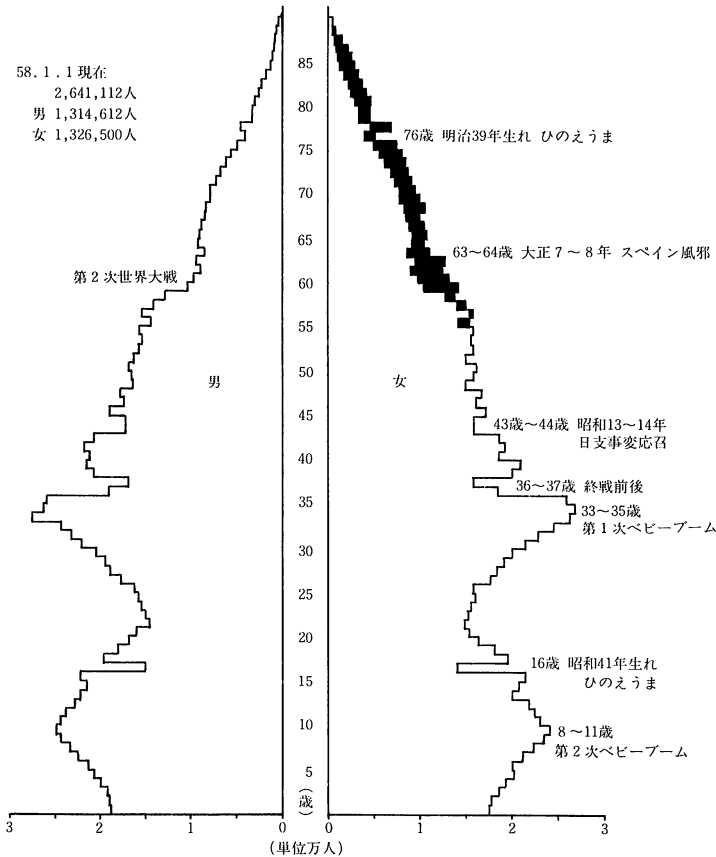


図-5 社会動態と自然動態(歴年)



図一六 人口ピラミッド



58年1月1日現在の人口ピラミッドを書いて見た(図一六)。クリスマスツリーの上の枝は戦後のベビーブームであり、下の枝は第2次のベビーブームといわれている。あと15年もすると第3次のベビーブームがくるのであろうか、出生の減はあと5年は続きそうである。女性側の黒くぬった部分は男性よりも多い人数を示している。その他の年齢はすべて男性が女性よりも多くなっている。その後は省略したが総体では女性の方が多い。57年1年間に死亡した人の数を性別・5歳階級別にグラフ化したものが図一七である。弱きものは男なりであろうか。折線グラフは死亡者数を前年の人口で割ったもので、その年齢の人の何%がなくなれたかを表わしている。正月そうそう縁起でもないから、この辺で筆をおくことにしよう。

している住民基本台帳人口は、外国人が含まれていないところが違う。この他、こうした夜間人口に対して昼間人口というのがあるが、これは国調のデータしかない。図一四は転入・転出・出生・死亡数の推移を歴年で見たものである。転入が転出をこえたのは44年からのことであるが、転出も53年を底にのびてきている。出生でガクンと落ちこんだ41年はひのえうまの年であった。転入・転出を相殺したのが社会動態であり、出生・死亡を相殺したのが自然動態といっている。この2つの動きを示したのが図一五である。自然増が社会増にぬかれたのは53年からであり、それも56・57年は半々ということになってしまっている。自然増には急激な動きが期待できないとすれば、社会増の創出に期待せざるをえまい。自然増の今後の動きを見るために、

図一七 性別・年齢別(5歳階級)死亡者数

